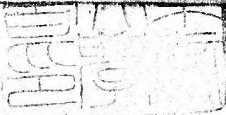
万治二年

仙臺紀行

全

仙臺紀行

著

いつれの御家より出入の職人あまたさふらはせ給ひたる中にいと上手のきはにあらぬもすくれて念を入るもありけりはしたなき我はと思ふ人く廉相を近み朝夕の御

つかひ道具につけても入れさせの
むにより次第にやすくし成也
きけり時の奉行あつはれにおほ
して始めより出入の者を外にな
し新器の者にわたし給はる其
訴訟　に書む方なしもろさ

しにもかゝる心のおとりにさそ世
もつまりあしかりけれとやうく
されらの國のもてなやみ草と成
て　蒲の手までも引出つべう
成ぬむく年の夏仙臺へ御入
國有しに御下屋敷の名にし

おふ濱の真砂の数ならぬも
冥加を思ひ〳〵に御見舞にく
たらんと音に聞ししら川の
関を目に見ちのくの旅の空な
をちく末の秋かけて思ひ立侍
ぬ

浅草口にて爰に紬嶋の名物あ
るとなれは

秋たつや浅草嶋の旅衣

さつて云所にて晝休しけり

秋来るや江戸をさつての宵の旅

杉戸といふ宿のはつれより日も

入あひの空に霧ふかくて東西わ
かちかたし

　夕霧もたて籠わたす杉戸哉

栗橋といふ川の渡し過て其夜は
むかひの宿にとまりぬ江戸の名
残のみ捨かたくていねもやらすい

つくにもあれしはし旅たつほそ
目覚る心地すれといふ事つふ〳〵
と思ひ出つまた夜ふかきに宿を
たちてちかくに程なく灯香と云
宿に付ぬなみ木の松かけに月の
残りたるを見て

所から灯香てや見たる月の舟

橋の名の栗おそ水のひやし物

其日は小山といふ宿に晝休みしぬ

白く秋の道の小山や一里塚

雀の宮といふ宿より暮に成てけれはたゝにかしこにとまらんとする

を

あひ宿や雀の宮に秋の旅

やう〳〵暮過てうつの宮といふ所に付ぬ聞しより町なみ廣く折ふし市のたつ日にて人群集してけり夜寒の比なれは碪うつ音

を聞て

旅ころも着なからうつの官間哉

きぬ川といふ所にて

秋草はよき絹川の色繪哉

其夜は大田原といふ宿にとまり
ぬ比しも年貢の米を里人の馬に
つけ身つから笈なとしてゆくを

里人の年貢をせおふ田原哉

奈須野をはる〴〵ゆくにむかふ
に見へて大きなる石あり口取馬
子にとふに是そいにしへの玉藻
の前か旧石といふを聞て

かたまりや冷しき此原の石

其夜はしら川といふ府に付ぬ旅のつかれはわすれて

長の夜や寝てしら川の関の鳥

明わたる空露時雨して旅衣しほたれにけりすか川と云宿に昼休みしけり爰に二階堂出羽入道道雲の菩提所のあるを一見して

露時雨ふるき名残じ二階堂

雨降りしきりてけれは高倉といふ宿に暮はやくとまりぬ

秋の日やまた高倉の宿とまり

八丁目といふ宿に晝休みし宿のあるじにとふに爰は景勝の御領内といふを聞て

世にひろし月の景勝御領内

藤田といふ宿にて日は西へかたふけは

秋の日はまもなふさかり藤田哉

越川といふ所より仙臺の御領分とてさかひになみ木の柳あり秋風に散しきて景氣さとなり

刺刀か柳にあつる秋の風

風の手や梳ふ柳の髪の

暮ふかく成は盲亀の心地して

秋暮て越川き旅の夜道哉

其夜は越川にとまり明る日は岩の間といふ宿に付ぬ爰は古内のなにかしとかや領し給ふと也さし入の山になみ木の松をうへられしを

城主やかはらぬ色と岩の松

日数ふるまゝに程なく仙臺の城下に付ぬ國歩町といふ所に宿をとりそれよりあない者もて御家中へ申入けれは折ふし君は遠嶋といふ所の御狩し給ふ比とて御帰待へきよし仰くたし給ふにまもなく御帰

りありて御目見への事うか〻ひ侍ぬ

朝かほや露の間いそく日の目見へ

孝勝院殿の御寺に参詣し下とし
て句に云いつもおそれあれと

虫けらも御庭を踏や法の寺

又の日御老中より仰ことありて九月
十七日は所の御祭禮也それに御出あ
るへけれは事のついてに御目見へすへ
きよしありかたくて登城して御目
見へ首尾よく済しそれより松嶋見
物にまかりぬ聞しよりまさりて中
〳〵語もふるなにたらす闇麻も筆

捨つへし源氏須磨の巻に心つくしの
秋風に海はすこし遠けれ共と云
りされはまた目の前に海ありて網
引する船いくら共なく波にうかひ
干潟のかたに崩れたる橋板をのれ
と石と成水の蛤劫を經て雀と成

る磯の真砂はよみつくす共詠めは
よもつきしとそ思ふしりへは山つゝ
きにて此しも秋の末なれは紅葉は
錦をおれるかとく也船にをるもし
らてあからめもせす詠やりぬ此嶋
の松はかり秋しらぬかほ成もまたな

かし

月影や此嶋臺の銀土器

初塩の波を詠めやりて

初塩の波のたゝえや枕ひき

秋の日のならひ物見する空もなき

夕の月に帰るさのあはたゝしさ見

残す事ほゐなしをしまにて

心さそ残りをしまの秋の景

舩のあしの早きにや程なく塩竈

の浦に付ぬ明神に参らんと歩

に成てやうく山によちのほりぬむ

かし融大臣此浦の眺望を聞

召
都の内にうつされたる
とかや其比の竈成とて大きなる
竈ありさひわたりて景様おか
し貫之か歌に君まさてと讀し
も實さる事ならんかしとそ思ふ
むかふは遠嶋といふ所なりといふ

をちなたより詠やりて
遠嶋も霧のはれまや千賀の景
程ありて御老中より御使ありは
る〳〵の旅の空なれはしはし足を
休め罷上るへきよしかたしけなき
仰ちとありて錄なと給はり漸々

神無月ひ　の日仙臺をたちて
のほるに都をは霞と共に出しかと
秋風そ吹しら川の関とよみしも
むへ也江戸を出し時は秋も半
なれは山〳〵の木　葉も色見へ
虫の聲しけしにいつとなく山は白
妙の雪と成月さえわたる空こそ
冷しかりきうき旅衣陸奥のけふ
のさむさの餞別に所の名物とかや
紙きぬ人のくれしを古郷へかへさ
の錦と思ひて肌にまとひぬ道祖神
といふ事を

身をまもれ道のたむけの神のきぬ

其日はつきぬきといふ宿に晝休みしけり爰に御茶屋のあるを見て

氷をやつきぬきて取御茶の水

大川原といふ宿にて

寒き日や追川原毛の旅の駒

其夜は白石と云宿にとまらんとするに雪ふり出ぬ山なたより見わたせは山のうへに岩をたゝみかけて城かまへあり此所は片倉の何かしとかや領し給ふといふ白石の名によせて

白石に少(チト)文字やそふ雪の空

同

打あけて見る白石や雪礫

明る朝たつ空に跡見送れははる
か成山に雪降つもりて雲か花かと
見へし馬子にあれはいか成山とと
へはさん候さゝや峠と申き行さき
は伊達の山とかたるをきゝて

地じあ成道行雪やだての山

同

花の色に見すぐや雪の空とほけ

福嶋といふ宿にて

ふく嶋のたちつけやよぐ冬の風

其朝も雪けの空に成てきのふ降しいやかうへにたまりぬ實や北なみの山は寒さもことにしてかたらめと思ひぬ道はたに童部共の鷺足といふ物に乗て雪のうへをかけるもあり又まろめてあそふもありけり

月を似せて丸める雪に影もかな

同

鷺あしは闇路の杖か雪の跡

其夜は二本松といふ府にとまりぬ朝

たつ首途に

　二本松たちて　春のあした哉

もと宮といふ宿に昼休みしぬ爰は
いにしへより町なみさひたるよし人
の云をきゝて

　さひたるや爰もと宮の神の留守

池に水鳥のあるを

　水鳥や長良ならぬなかれ足

　　同

　波間の鴨の赤かしら

氷山といふ宿にて

　名にし追馬よすへるな氷山

すか川といふ宿に付指を折て旅の日数をかそふるに歌の文字に過ぬけにやさひしきひとり旅物うきやとを取まれけふと暮しつあすか川のなかれて早き瀬を氷魚とるを見て

すか川の網もる氷魚や鰐の口

しら川にて

しら川の足袋の日もそふてらし哉

芦野といふ宿にて

雪の跡立ゆく雁のあし野哉

なへかけといふ川ありくたりには

水なりしに此度は橋のかゝりたるを
見て
冬川の橋やよき鍋かけのつる
さく山といふ宿にて
花の咲山よりやます雪の景
狐川といふ宿に付ぬ爰とは狐川
とも云きつれ川ともいふふたつのなか
れわかちかたくて
雪道やまよいて爰にきつね川
其昔はうつの宮に旅居し宿のある
しに江戸にかはる事もなきかとゝへは
いかにも静謐のよしいふを聞て

さととへはあとをもうつの宮の人
　江戸に何事ありやなしやと

石橋といふ宿にて
　石橋の地よりもたつや霜柱

さかねか原といふ宿にて
　雪の日や銀となるさかね原

其夜はかすかへといふ宿にとまり
ぬ夜るの寒さに
　寒き夜るの物がすかへの宿もかな

浅草口にて江戸入のうれしさに
　冬の日も江戸入するや西の空

道つれのなきまゝに旅の日暮し
宿の闇灯にむかひ心にうつりゆく
道の日記をそこはかとなく書付
れはあやしうこそおほつかなけれ
いてや此世に生れてはねかふにだら

ぬ事のみおほかめれ松平の
木高き御位はいとかしこし大名
竹の園生の末の子まて人輪の種
ならぬそ一の家老の威勢はさ
　人もきり米なと給はる方は
ゆゝしと見ゆ道の馬子等は落

ふれたれと小哥なまめかしそれよりつらね歌は程につけ　雪にあひしたりかほの句をみつから慢して云出すもいとたのしみあり
し隠居たにうら山しからぬならし人には狸そしりのやうに思はるるよと
かたりに云るも實
さる事そかし勢ひもうにのほるにつけてうれしとは思はぬと持丸長者の云けむやうに外聞くるしく人には佛のおとくにたかふらんとそ思へるひたふるのすり　者は

うら山し　　有なむ人はりちき
さまのすくれたらんこそあらま
ほしけれ物うちいひあいきやうあ
りて言葉おゝかるこそあかす物
むさぶらまほしさ　なれ目をひき
笑ふ人の心さそと思はるゝ俗性し

れんこそ口おしけれ奥　人
生れつき不調法なれ心はなとか實
なるよりかしこきにもかよはさらん
形心さまよき人も　薄の心あれ
はへりくたり顔にくていふ人に立
ましりて目かけすけおとさるゝこ

そほゐなけれまたとありたきは
和哥の道文の道人の鏡なら
ん高位にましはるへけれ手なと
つくねはしりまはり聲おかしく機
嫌とり音信たへす物するから下
根ならぬたそおとたはよけれ

蒲やおもてにたつる根なし松

万治貳年
神無月下旬

有次

此書は著者自筆にして、予が坊間に
発見せしなり、原本は小形の巻物にして奥
に年号と自署花押あり、茲に写すが如し、
原本は巻頭に書名著者名を記しあらず、
予が書籍の体裁上加へたるなり、文中判読
に困しむもの及び虫ばみたる部分は□を以
て填し置く、それにて欠字の数を知るべし、
此書実に珍本と言ふを得べし

己酉初冬　山石本震五子識